

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 32 回

第 7 章 天沢退二郎先生

その 1 『犬のバルボッシュ』(上)

1982 (昭和 57) 年 3 月 13 日の夕刻、パリ 10 区ボン・ヌーベルの韓国料理「竹園」で私たちが食事をはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内された。ひとりは、天沢退二郎先生 (1936~2023 年) だった。

若狭蔵之助先生とミシェル・ビュトール

1982 (昭和 57) 年 2 月 1 日の午後まだ早い時間に、私と母は、当時の東京都板橋区の自宅の最寄りである東武東上線・下赤塚駅のホームで上りの電車を待っていた。よく晴れた日だった。その日の 21 時に成田空港を出発するエール・フランスに、ふたりでのることになっていた。

公立小学校を 1 年間休職して、ニースの奥のヴァンスにある「フレネ学校」に「留学中」だった若狭蔵之助先生が、帰国する前に来ないかと母をさそった。そして、母は、「付きそい」でいっしょに行かないかと私をさそった。母にとってははじめての、私は 2 回めの海外だった。私は、大学院修士課程の 3 年次がそろそろ終わる 26 歳だったけれども、修士修了を引きのばしていた。それでも、つぎの年度の 4 年次にはどうしても修士論文を提出しなければならない。

前の年の 1981 (昭和 56) 年 3 月 8 日に、丸 13 年病んだ父が亡くなって、もうすぐ一周忌だった。母も私も何もいわなかったけれど、長い看病だったが、それでも、父を無事に見送ることができてお疲れ様という旅行だった。亡くなるまでの最後の 5 年間、父が入院している時期、『先生のつうしんぼ』(小野かおる絵、偕成社 1978 年) など母宮川ひろの本がずいぶん読まれて、おかげで、私たちは、18 日間の海外旅行にも出かけることができた。

この旅行から帰国したあと、翌年度には、私は、思いがけないことから、仙台にある国立の単科大学、宮城教育大学の教員公募に応募することになる。修士課程を何とか修了して、思いがけず採用された宮城教育大学に「児童文学」担当の専任講師として赴任したのは、1983 (昭和 58) 年 6 月 1 日である。父が亡くなって以来の母とふたりの暮らしは、実は、このあと 1 年数か月で終わることになる。

さて、下赤塚駅のホームである。私が思いついて、「そういえば、若狭先生は、なんていう作家の家に下宿してるの?」とたずねた。先生は、ニースで、あまりよく知られていない作家の家で暮らしていると聞いていた。母が、かばんのポケットから取り出した手帳のページを開いて読み上げる。——「えーとね。ミッシェル・ビュトール。」「ええーっ。すごい作家だよ。」——私は、大きな声を出した。

西欧 20 世紀の方法

私は、ミシェル・ビュトール (1926~2016 年) の作品を読んだことがなかったが、名前を知っていた。中・高校生のころに愛読していた中村真一郎の『現代小説の世界 西欧 20 世紀の方法』(講談社現代新書 1969 年) で取り上げられていたのだ。「日本の小説の方法は成熟していない」と考えた中村は、小説家としての切実な関心から、フランスを中心に文学上の前衛に属する作家たちの仕事を見ていく。「プルーストとジョイス」からはじまって、作家ふたりずつを対比的に語る八つの

章で構成されているのだが、その7番めが「ビュトールとシモン」である。シモンは、クロード・シモン。「小説の方法」というテーマに新鮮な魅力を感じた十代の私は、この新書を何回も読んだ。中村の連続講演を書籍化した、話しことばで書かれた本は、とても読みやすく、おもしろかった。ビュトールについては、代表作の『時間割』や『心変わり』が紹介されている。『心変わり』は、主人公がパリからローマまで行く汽車のなかの話。

ビュトールは、ここでたいへんおもしろい実験を試みています。いままでの小説家がめったにやらなかった第二人称を使って書いているのです。わたしはどうした、かれはどうした、というのではなくて、きみはどうした、という二人称を使って書いている。読者は読んでいるうちに、作者から「きみ……」と呼ばかけられているような気がしてくるのです。自分が汽車にのってパリからローマへ向かっているような錯覚を起こす。(パリの一宮川注) 女房を捨てて、(ローマの一宮川注) 恋人といっしょになろうとしているような気にさせられてしまう。「催眠術のやり方だ」と翻訳者(1959年に河出書房新社から翻訳を刊行した清水徹のことだろう一宮川注)はいつております。

ここを読んだ私は、びっくりした。二人称の小説……。しかし、十代の私は、『心変わり』を読まなかった。

東武東上線の各駅停車にのってからも、私は、以前手に入れた知識をもとに、ビュトールがいかにすごい人かを語った。20分足らずで、池袋に着く。私たちは、いそいで東武デパート池袋店のなかにある大きな本屋さん、旭屋書店に立ち寄って、ビュトールの本をさがした。幸い、『河出海外小説選』版の『心変わり』(清水徹訳、河出書房新社1977年)を手に入れることができた。白い表紙の瀟洒な装丁のこの本をもって、成田に向かった。「きみは真鍮の溝の上に左足を置き、右肩で扉を横にすこし押してみるがうまく開かない。」——これが小説の書き出しだ。

『フレネへの道』

母宮川ひろを南フランスまで呼び寄せた若狭蔵之助先生(1929～2010年)とはだれか。そして、宮川ひろに何を見せたかったのか。

『生活のある学校 遊び・手仕事・子どもたち』(中公新書1977年)は、先生が東京都練馬区の大泉学園小学校教諭時代の著書だ。その「はじめに」で、「「わからせること」より「競争させること」を教育の原理としていること」などを現代の学校の病として、その病とたたかうために「教室での子どもの生活の復興から始めることにした。」という。この本の第一部「教室の文化運動」には、小学3、4年生のクラスの地域で畑を借りての学級農園づくり、教室のなかでの小犬の飼育、学級文庫係が発行する文庫新聞のことなどが記録されている。第二部「地域に根づく生活学校」では子どもの生活を地域に根づかせる活動が、第三部「調べる社会科・わが郷土」では子どもたちが地域での生活することの意識化をうながす活動が報告されている。これらは、若狭先生が所属していた民間教育研究団体「日本生活教育連盟」(日生連)での学びがもとになっていいるのだろう。

『生活のある学校』に書かれたような若狭先生の実践とよく似たことをした人がフランスにいる、セレスタン・フレネ(1896～1966年)だと教えたのは教育学

者の佐藤英一郎さんだったという（若狭蔵之助『フレネへの道 生活に向かって学校を開く』青木書店 1994 年参照）。フレネの教育については、若狭先生の別の著書『子どもをのぼす自由教室 新しい教育をめざして』（講談社現代新書 1983 年）に簡潔に述べられている。

フレネは戦前戦後を通じ、一貫して生活と教育を結びつけることを追求し、そのための多くの技術を開発してきた。その技術の基礎となったのは、わが国の生活綴方教育運動にも似た、学校印刷所運動である。

一九二〇年、彼は南フランスの山の中の小さな学校に赴任した。（中略）午後の時間を使って、散歩教室をはじめた。村の小川や野原を歩いたり、畑や職人たちの仕事場を見てまわった。そのとき子どもたちは、好奇心と活力にあふれ、教師と親しげに語り合った。

（中略）

フレネは散歩教室で発揮される、子どもの活力を、どうしたら学習の中に、もちこむことができるかを考えた。そして、教室に印刷機を備えつけ、子どもたちが綴った文を印刷し、それを教科書にかえて、「自由な教科書」として、使うことを考えついたのである。（ルビ原文）

若狭先生は、フレネの著書を翻訳するなどして（『フランスの現代学校』石川慶子と共訳、明治図書 1979 年）勉強していたが、1981（昭和 56）年度の 1 年間、実際に「フレネ学校」で過ごすことになる。そのときのことは、1983 年の著書『子どもをのぼす自由教室』（前掲）で、まず、報告された。

「瓦屋の秘密」と『おとうさんにかんぱい』

実は、私は、小学生だったときに、若狭先生を知っていた。先生は、大泉学園小学校の前に、私が 5 年生まで在籍した板橋区立下赤塚小学校につとめていたのだ。若狭先生が何年生の担任だったのか、よくわからないのだが、H 先生という女性が担任をしていた私たちの 5 年 4 組にときどきやってきた。5 年 4 組が学校を代表して板橋区の合同学芸会に出演する、その劇の練習に立ち会ってくださったこともある。若狭先生は、教員組合にかかわる用事があって、H 先生に話をしにきていたのかもしれない（私の小学 5 年生は 1966 年だが、先生は、68 年に都教組板橋支部支部長になる。『フレネへの道』前掲参照）。

宮川ひろの『おとうさんにかんぱい』（長谷川知子絵、秋書房 1981 年）は、若狭先生のうながしで 4 年生の小泉敬太くんが時間をかけてつくった「自由勉強」のノート「瓦屋の秘密」を素材に創作された作品である（あとがきに敬太くん父子への謝辞がある。作品の主人公は小林圭太）。瓦屋の職人であるおとうさんの仕事のことを数多くの絵と文でまとめた「瓦屋の秘密」は、若狭先生の著書『学習の出発 子どもたちの自由な表現から』（民衆社 1980 年）にくわしく紹介されている（ここでは小林圭助だが、仮名だろう）。母と若狭先生の出会いは、この『学習の出発』の刊行のころだと思われる。（注 1）

たとえば、『先生のつうしんぼ』（前掲）の物語は、3 年 1 組の子どもたちが蚕を育て、まゆから糸をとり、おしまいには、糸で絹を織るところまでに即して展開する。これは、群馬県の坂爪セキ先生の「カイコの授業」の実践がもとになっている

のだが（注2）、宮川ひろのモチーフは、「生活教育」とまったく重なっている。長野県・諏訪の「御柱祭り」をていねいになぞっていく4年生のクラスの「ミニおん柱祭り」に取材した『三十八人のおん柱祭り』（山中冬児絵、ポプラ社1983年）など、そうした作品は、その後も多い。若狭先生は、かつてご自身がいわれたように、宮川さんの作品と似たことをした人がフランスににいるとあって、「フレネ学校」にさそったにちがいない。

ニースへ、ふたたびパリへ

私たちは、パリから国内線の飛行機でニースへ行った。ニースの空港には、若狭先生が迎えに来てくれていた。私も、母といっしょにいったんニースからヴァンスに行って、ホテルに泊まったが、そこで母を若狭先生にお願いして、ひとりで車で国境を越えてイタリアに行った。私は、「フレネ学校」には行かなかったのである。学部を卒業して、大学院浪人がはじまった1978（昭和53）年の春にボローニアの国際子どもの本の見本市に出かけて（注3）、私は、イタリアが好きになっていた。

ベネチアとミラノでのべ6泊してニースに戻ると、母は、1週間ほどの「フレネ学校」見学を堪能したようだった。（注4）見学には、お願いしてパリから来てもらったIさんという日本人の女性が通訳としてずっと付きそってくださった。若狭先生も、Iさんに助けられて、帰国前に確かめておきたい、いろいろなことができたようで、満足していらっやったと思う。

母と私とIさんは、若狭先生とおわかれして、パリに向かう。その前に先生の下宿をたずねて、家主のミシェル・ビュートルにもあいさつをした。おだやかな感じの人だった。ビュートルの家は、広々と明るく、家のなかで猟犬のような、しかし、おとなしい犬を飼っていた。私は、日本で買った『心変わり』にサインをしてもらった。若狭先生の通訳で、私の指導教授（前田愛先生）は訳者の清水徹さんと友人だといったら（注5）、ビュートルは、「トオル・シミズによろしく」といった。そういう機会があるかなと思ったけれど、私は、「はい」といった。

第7章は「天沢退二郎先生」なのに、天沢先生がまだ、ちっとも出てこない。だが、このとき、天沢先生は、パリにいたのだ。（つづく）

（注）

- 1、『学習の出発』のことを母に教えたのは、たとえば、佐藤静子先生だったかもしれない。佐藤静子先生は、若狭先生の『生活のある学校』（前掲）にも登場する若狭先生の研究仲間だ。のちの宮川ひろ『天使のいる教室』（ましませつこ絵、童心社1996年）は、佐藤学級に取材した作品である。作中、「さとパン先生」（静子先生自身のあだ名でもある）は、小児癌のあきちゃんを1年生のクラスに招き入れる。若狭先生の著書『子どもと学級 生きる力を育てる』（東京大学出版会1986年）にも、「児童文学作家の宮川ひろさんとの出会い」について書かれたところがある。
- 2、『先生のつうしんぼ』のあとがき参照。群馬県教職員組合発行『文化労働』に発表された実践記録。
- 3、このときは、ボローニアのホテルで、私より50歳年上の童謡詩人・研究者、藤田圭雄先生（1905～1999年）と3泊ルームシェアをしたり、町で、翻訳家で、

のちの直木賞作家、常盤新平さん（1931～2013 年）のタクシーにたまたま同乗させてもらったり、いろいろなことがあったのだが、それはまた、別の話。

4、帰国後、母は、「フレネ学校」に寄付金を送ったようだ。そのお礼なのか、わが家の玄関には、「フレネ学校」の子どもたちが描いた絵が、いまも、かかっている。縦 70cm あまり、横 90cm あまりの大きな水彩画で、絵のなかの丘には花を咲かせた大きな木があり、鳥が飛び、お日さまがかがやいている。

5、たとえば、この前の年の座談会「読者論・読書論の今日的意味——文学論の前提として——」（『国文学 解釈と鑑賞』1980 年 10 月）は、前田愛先生の司会で、出席は、清水徹さんと、日本近代文学専攻の山田有策さんである。この時期、前田先生と清水さんは、「読者」「読書」というテーマに共通の関心をもっていたと考えられる。